

介護老人保健施設ライフサポートねりま

症例概要 利用者：80代 性別：女性 介護度：要介護4

病名：左大腿骨転子部骨折術後、右急性硬膜下血腫 新型コロナウイルス感染症後

利用サービス：入所

経過：2023年5月中旬に自宅で転倒し、左大腿骨転子部骨折受傷、翌日に観血的整復固定術を施行。同月下旬に転倒し頭部打撲、頭部CTにて外傷性右硬膜下出血が発覚、内服による治療を開始。6月中旬よりリハビリテーション病院に入院。9月上旬に新型コロナウイルスに感染するも内服にて改善。ADL全般に介助が残ったため、特別養護老人ホームに入所するまでの身体機能の維持・改善を目的として当施設に入所する。

内 容

本事例は2023年9月より入所され、回復期病院でのリハビリを経たが、度重なる転倒や傷病によりADL全般に介助が残ったため入所したという経緯があった。

病前は自宅で生活し、歩行・トイレも修正自立であったが、その時より徘徊で警察保護が3回あるなどトラブルが発生していた。今回の入院にて認知機能の低下、車椅子で介助ベースになったこともあり、今後は自宅生活が難しいとのご家族判断にて、入所の運びとなった。

入所当初は難聴の影響もあり、指示が入りにくく、会話も成立しない場面が多くみられていた。表情も陰しく、立位でも疼痛や恐怖心から介助依存の傾向があった。それに伴い、リハビリでも立位訓練などに拒否が見られていた。さらに、不安から夕方頃になると車椅子自走しての徘徊が頻発し、「バスに乗って帰りたい」との訴えが聞かれていた。夜間の起き上がりも見られ、転倒歴もあることから、センサーも必要であった。

ご家族より、トイレ動作の改善だけでなく、「元気でいてほしい、日中は起きて過ごして施設生活を楽しんでほしい」という希望が聞かれていたため、余暇時間の提供やリハビリ以外の時間での頻回な声かけなどを行うなどして、ご本人が落ち着いて生活できる環境の構築を図った。算盤を使用しての計算課題の受け入れが良かったため、スタッフ付き添いで提供を行う、またリハビリでも傾聴を行うなどして、ご本人の不安感を取り除くよう配慮した対応を行った。

そして10月中旬頃になると夕方の徘徊は減少、計算や体操などのレクリエーションにも参加され、日中離床して穏やかに過ごせるようになった。当初よりも会話も成立するようになり、職員との交流が増え、それに伴い表情が柔らかくなり笑顔も多くみられるようになった。立位やトイレも、恐怖心や疼痛による介助

は継続していたが、声かけや介助で安心感を提供することで、ご自身で行おうとする様子も見られるようになった。リハビリでも拒否が減少し、立位や歩行練習がスムーズに行えるようになった。

11月に入ると夜間良眠で安定し、独力も見られなかったため、センサー撤去を達成することができた。また、米どころの地方ご出身で「お米が大好き!」と新米を力に活気も上がり、お食事も笑顔で楽しめるようになった。

不穏の見られたケースに対し、ご本人の不安や訴えに寄り添って対応し、信頼関係を育んだことで、お互いに笑顔で過ごせる時間を共有することができた。傾聴など真摯な対応、親身に接することの大切さを改めて感じさせる事例となった。